決勝トーナメント進出が決まり喜ぶ日本代表サポーター＝29日午前0時52分、宇都宮市池上町、橋本裕太撮影

薄氷突破に安堵、歓声

県都の飲食店でも声援

サッカーのワールドカップ（W杯）ロシア大会で、日本代表の決勝トーナメント進出が決まった29日未明、県民から歓声が上がった。宇都宮市内の飲食店では、大勢のサポーターが集まり声援を送り続けた。ポーランドには惜敗したものの、ぎりぎりでの決勝トーナメント進出が決まると、店内には安堵（あんど）感が広がった。

同市池上町の英国風パブ「ライオンズヘッド県庁前店」には、日本代表のユニホームを着たサポーターら約70人が詰め掛け、56インチの画面に映し出された試合に集中した。

後半、ポーランドが先取点を挙げると、一瞬の沈黙の後、悲鳴が上がった。

試合終了後、セネガル対コロンビア戦の行方に気をもむサポーターだったが、日本の決勝トーナメント進出決定が伝えられると、ハイタッチを交わして喜びを分かち合い、「日本コール」で代表の奮闘をたたえた。

同市末広1丁目、団体職員遠藤弘基（えんどうひろき）さん（24）は「とりあえず決勝トーナメントに行けて良かった。これから強豪が待ち構えるが、堂々と戦ってほしい」とエールを送った。（阿部雅士（あべまさし））

日本―ポーランド　前半、ヘディングシュートを放つ岡崎（右）＝ボルゴグラード（ロイター＝共同）

日本、こじ開けた16強の扉

苦しみながら前へ

気温34度の厳しい暑さの最終戦で、一丸となった日本が何とか16強への扉を開けた。第2戦から先発6人を入れ替えて臨んだ勝負のポーランド戦。香川ら攻撃の核を外して流れるようなパスワークを失った日本は初黒星を喫したものの、2大会ぶりの決勝トーナメントへ進んだ。西野監督は「本意ではない。こういう形も成長していく中での一つ」と話し、大きく息をついた。

酒井高や山口蛍が中盤に入り守備強度は増した。ボールを回してくる相手に4―4―2で守備網を築き、奪って速攻を狙う。狙いは明確で、前半12分には岡崎がダイビングヘッドを放つなど前半はうまく戦った。

結果を残している主力を外す選択にはリスクもあったが、サブとして支えてきた選手の力を信じているからこそ打てた一手だ。GKの選択にも信頼がにじんだ。セネガル戦でミスをした川島から代えなかった。監督はセネガル戦後に川島と個別に話して今後も起用する方針を伝えた。ミスを取り返そうと精神面で不安定にならないように手を尽くした。その川島は前半32分にヘディングを好守で防いで応えた。

1点を追う展開では右MFが不慣れな酒井高のサイドが機能せず攻め手がなかった。終盤は他会場の結果を頼り、守備固めで長谷部を入れて時間稼ぎで球を回した。「次に進める結果を得たのは大きい。（次の戦いも）日本中の力を合わせていく」と長谷部。苦しみながら歩を進めた。

（ボルゴグラード共同）

川島永嗣の話　きょうは自分がチームを救う番だと思っていた。しっかり仕事ができてよかった。一人一人の気持ちがこの結果（16強入り）につながった。

武藤嘉紀の話　（W杯は）幼い頃の夢だった。そこでゴールを決めたかったが、かなわなかったので決勝トーナメントで必ず決めたい。